

○正社員

報告書の結果について

本データの単純集計結果は、基本的には報告書に記載されている数値と一致します。

ただし、報告書の数値と一致しない箇所、及び、報告書の結果と比較する際に注意が必要な箇所について以下に示しました。

変数の扱いについて

1)年(時点)を把握するための変数

例 [q6_1sc2 と q6_1]

問6-1においては、現在の勤務先に入社した年を、元号および年(和暦)で聞き、集計時にそれを西暦に換算しています。このような場合、本データでは西暦の年を公開しています。該当する q6_1sc2 はスケール変数、これをカテゴリ化した変数が q6_1 となります。

同様の扱いをしている変数

[q8_1sc2 と q8_1] [q9_1sc2 と q9_1_1] [q11_1_1sc2 と q11_1_1] [q15_3_1sc2 と q15_3_1]

2)労働時間を把握するための変数

[q8_6sc と q8_6]

問8-6 裁量労働 みなし労働時間数においては、1週当たり、または1月当りのみなし労働時間数(どちらか答えやすい方)を聞き、そこから月間に換算したみなし労働時間を把握しています。本データでは、月間に換算したみなし労働時間を示す変数を公開しています。

スケール変数とカテゴリ変数における「無回答の扱い」について

スケール変数と、それをカテゴリ化した変数を併せて提供している場合、スケール変数では無回答に相当するケースを無回答指定せず、システム欠損値としています。一方、カテゴリ変数においては、当該ケースを無回答指定しています。

例 [q6_1sc2 と q6_1]

q6 (問6-1 現在の勤務先 入社年)で無回答だった29ケースについて、q6_1sc2 (スケール変数)では欠損値処理しているが、q6_1 (カテゴリ変数)では同じ29ケースを無回答指定しています。

同様の扱いをしている変数

[q7_2sc と q7_2ca][q8_1sc2 と q8_1][q8_6sc と q8_6][q9_1sc2 と q9_1_1][q11_1_1sc2 と q11_1_1]
[q14_5sc と q14_5] [q15_5_1sc q15_5_2sc q15_5_3sc q15_5_4sc q15_5_5sc q15_5_6sc q15_5_7sc
と q15_5_1 q15_5_2 q15_5_3 q15_5_4 q15_5_5 q15_5_6 q15_5_7][q15_3_1sc2 と q15_3_1][q15_7sc
と q15_7] [q15_9sc と q15_9] [q15_10sc と q15_10] [q15_11sc と q15_11]

○非正社員

報告書の結果について

本データの単純集計結果は、基本的には報告書に記載されている数値と一致します。

ただし、報告書の数値と一致しない箇所、及び、報告書の結果と比較する際に注意が必要な箇所について以下に示しました。

変数の扱いについて

年(時点)を把握するための変数

例 [q6_1_1sc2 と q6_1_1ca1]

問6-1においては、パートタイマーとして働き始めた年を、元号および年(和暦)で聞き、集計時にそれを西暦に換算しています。このような場合、本データでは西暦の年を公開しています。該当する q6_1_1sc2 はスケール変数、これをカテゴリ化した変数が q6_1_1ca1 となります。

同様の扱いをしている変数

[q6_3sc2 と q6_3ca1] [q7_1_1sc2 と q7_1_1ca1] [q7_3sc2 と q7_3ca1] [q8_1_1sc2 と q8_1_1ca1]
[q8_3sc2 と q8_3ca1][q9_1_1sc2 と q9_1_1ca1][q9_3sc2 と q9_3ca1][q10_1_1sc2 と q10_1_1ca1]
[q10_3sc2 と q10_3ca1] [q11_3sc と q11_3ca]

スケール変数とカテゴリ変数における「無回答の扱い」について

スケール変数と、それをカテゴリ化した変数を併せて提供している場合、スケール変数では無回答に相当するケースを無回答指定せず、システム欠損値としています。一方、カテゴリ変数においては、当該ケースを無回答指定しています。

例 [q6_1_1sc2 と q6_1_1ca1]

q5_3 (問5-3 現在の勤務先 あなたの雇用形態) で「パートタイマー」と答えた 1783 ケースのうち、問6-1-1 パートタイマー 勤務開始時期 年 で無回答だった 37 ケースについて、q6_1_1sc2 (スケール変数) では欠損値処理しているが、q6_1_1ca (カテゴリ変数)では同じ 37 ケースを無回答指定しています。

同様の扱いをしている変数

[q6_3sc2 と q6_3ca1] [q6_5sc と q6_5] [q6_8_1sc と q6_8_1] [q7_1_1sc2 と q7_1_1ca1] [q7_3sc2 と q7_3ca1] [q7_4hu と q7_4_1] [q8_1_1sc2 と q8_1_1ca1] [q8_3sc2 と q8_3ca1] [q8_4hu と q8_4_1] [q8_8husc と q8_8hu] [q9_1_1sc2 と q9_1_1ca1] [q9_3sc2 と q9_3ca1] [q9_4hu と q9_4_1] [q9_5_5sc と q9_5_5ca] [q10_1_1sc2 と q10_1_1ca1] [q10_3sc2 と q10_3ca1] [q10_4hu と q10_4_1] [q10_5_6sc と q10_5_6ca] [q11_3sc と q11_3ca] [q11_5_1sc, q11_5_2sc, q11_5_3sc, q11_5_4sc, q11_5_5sc, q11_5_6sc, q11_5_7sc と q11_5_1, q11_5_2, q11_5_3, q11_5_4, q11_5_5, q11_5_6, q11_5_7] [q11_8sc と q11_8] [q11_10sc と q11_10] [q11_11sc と q11_11ca]

○自営業主・家族従業者

本データの単純集計結果は、基本的には報告書に記載されている数値と一致します。

ただし、報告書の数値と一致しない箇所、及び、報告書の結果と比較する際に注意が必要な箇所について以下に示しました。

変数の扱いについて

年(時点)を把握するための変数

例 [q6_6sc2 と q6_6ca1]

問6-6においては、専属請負として働き始めた年を、元号および年(和暦)で聞き、集計時にそれを西暦に換算しています。このような場合、本データでは西暦の年を公開しています。該当するq6_6sc2はスケール変数、これをカテゴリ化した変数がq6_6ca1となります。

同様の扱いをしている変数

[q7_1sc2 と q7_1ca1] [q8_1sc2 と q8_1ca1] [q9_1sc2 と q9_1ca1] [q13_3_1sc2 と q13_3_1]

スケール変数とカテゴリ変数における「無回答の扱い」について

スケール変数と、それをカテゴリ化した変数を併せて提供している場合、スケール変数では無回答に相当するケースを無回答指定せず、システム欠損値としています。一方、カテゴリ変数においては、当該ケースを無回答指定しています。

例 [q6_2_1sc と q6_2_1ca]

q5_5 (問5-5 現在の事業 事業の種類) で「専属請負」と答えた616ケースのうち、問6-6 専属請負 現事業開始年 で無回答だった48ケースについて、q6_2_1sc (スケール変数) では欠損値処理しているが、q6_2_1ca (カテゴリ変数) では同じ48ケースを無回答指定しています。

同様の扱いをしている変数

[q6_6sc2 と q6_6ca1] [q6_15_1sc と q6_15_1ca] [q6_15_2sc と q6_15_2ca] [q7_1sc2 と q7_1ca1]
[q7_5_1sc と q7_5_1ca] [q7_9_1sc と q7_9_1ca] [q7_9_2sc と q7_9_2ca] [q8_1sc2 と q8_1ca1]
[q8_7_1sc と q8_7_1ca] [q8_12_1sc と q8_12_1ca] [q8_12_2sc と q8_12_2ca] [q9_1sc2 と q9_1ca1]
[q9_4_1sc と q9_4_1ca] [q9_4_2sc と q9_4_2ca] [q13_3_1sc2 と q13_3_1] [q13_5_1sc, q13_5_2sc,
q13_5_3sc, q13_5_4sc, q13_5_5sc, q13_5_6sc と q13_5_1, q13_5_2, q13_5_3, q13_5_4, q13_5_5,
q13_5_6] [q13_5_7sc と q13_5_7] [q13_8sc と q13_8ca] [q13_9sc と q13_9ca] [q13_10sc と q13_10ca]